OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	白いヘレネーと黒いヘレネー(そのニ)
Author(s)	上村, くにこ
Citation	Gallia. 1987, 26, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

白いヘレネーと黒いヘレネー（その二）

上　村　くにこ

6．復讐されるヘレネー

a．刺し殺されるヘレネー

《姦婦》クリュタイムネーストラーを殺した息子オレステスは有罪か無罪かという事は，重要問題であった。オレステスの犯罪は父親の仇を討つ事と母親を殺す事とどちらが重いか，父権と母権が対立した場合，息子はどちらに味方するべきか，という問いにつながるからである。それがどう解決されたかについては，アイスキュロスの『エウメニデス』にはっきりと示されている。父親原理を代表してオレステスを擁護するアポロンと，母親原理を代表してオレステスを糾弾するエリーニュエスとの対立をアテナイ市民が審判することになる。オレステスは自分は父親から生まれたのであって，母は父の播いた種を宿したにすぎないと主張するが，この言い分はアテナイ市民のちょうど半数の賛成しか得られない。最後にアテネー女神がオレステスのために投票したので，彼はかろうじて無罪となった。この結果に腹を立てたエリーニュエスは，アテナイに禍をもたらそうと荒れ狂うが，アテネー女神のとりなしで，その名も「エウメニデス(祝福の女神)」となって，アテナイの繁栄に寄与することになるというのが結末である。この解決法は男性原理の勝利と女性原理の敗北と妥協を象徴している，という解釈が成り立つわけだが，一つ気になる事は理想化された女性原理であるヘレネーの審判はどうなったか，という事である。ホメロスはゼウスの娘ヘレネーの審判などは思いもよらないという態度を取ったのだが，国の財宝を盗み，夫を欺き，戦争をひき起したヘレネーの罪はその後も決して問われる事はないのだろうか？　ヘレネーの前身はゴルゴンやエリーニュエスなどの「恐ろしい女性達」の姉妹だった事を思い起すと，「理想化された女性美」の象徴であるヘレネーは父権思想が整備されてゆく中で，どの様な位置付けがされたのだろうか？

この問いに答えてくれるのはエウリピデスの『オレステス』である。この戯曲の時間的設定は殺戮後六日目，クリュタイネーストラーの死体を焼いた柴にまだぬくもりが残る頃という事になっている。メネラオスがヘレネーを連れてアルゴスの町に戻ってくる。ここに現われるヘレネーは先の『ヘレネー』の戯曲に示された貞淑な妻の鑑からは程遠く，『トロイアの女達』の中で示された様な《諸悪の根源》としてのヘレネーである。むしろ，も

っと悪しざまに悪女としてののしられている。エレクトラはヘレネーを「神々に忌み嫌われた女[1]」と呼んでいるし，ヘレネーに侍ってイダからはるばるやってきたプリュギア人は彼女のことをこう呼ぶ。

「鳥より生まれし——
白鳥の羽美わしき姿そなえて
レダに生まれし——悪女ヘレネを恨まん，
切石のアポロン砦のエリニュスを[2]」

切石のアポロン砦とはトロイアの町を守る城壁のことで，この壁がアポロンによって建てられたという伝説があることから，トロイアの城壁に立つヘレネーをこのように呼んだのである[3]。エウリピデスがこれを書きながらエリーニュエスの姉妹グライアイの事を考えていたかどうかはわからない。それにしても世界一の美女と恐ろしい形相の怪物のイメージが重なり合っているという事は注目すべきことである。

さて到着するや否や姉惨殺の悲報を聞いたヘレネーは自分の美しい髪を切り，神酒の壺を手にして舞台に登場し，それを姉の墓に捧げるように娘エルミオネーに託する。しかしこの殊勝な行為も決して好意的には見られない。エレクトラはヘレネーが退場した後，観客にさとすように言う。

「生れつきというものよ，お前は人々の間で何と大きな災禍の因でしょう。(…)お分りになりますか，髪の毛の先の方だけ切取ったのが？——みめが大切さに。昔ながらの女ですこと。神々があなたをお憎みになりますように。この私を，この弟を，そして全ヘラスを滅ぼした代りです[4]」

いよいよ明日は姉弟が母殺しの罪でアルゴス市民によって石投げの刑を執行されるという日の前夜，姉弟とそれにオレステスにずっと付き添ってきた親友ピュラデスの三人は，「禍いのもと」であるヘレネー刺殺を企てる。「その父親を殺し，あるいはその子らを滅ぼし，妻たちから配偶(つれあい)を取り上げて寡婦にした人[5]」を殺すのだから，人々は三人に感謝

---

(1) エウリピデス『オレステス』小川政恭訳，人文書院，1960，p. 321.
(2) *Ibid.*, p. 362.
(3) EURIPIDE; *Oreste*, texte établi et annoté par Fernand CHAPOUTHIER, Société d'Edition "Les Belles Lettres", 1959, p. 88.
(4) エウリピデス『オレステス』小川政恭訳，人文書院，1960，p. 324.
(5) *Ibid.*, p. 354.

し，祝福するだろうと考えたのである。

オレステスによるヘレネー殺戮の場は，直接舞台では演じられず，ヘレネーの悲鳴が聞こえるだけである。アルゴスの高貴な処女達から成るコロスは「お館で亡骸(むくろ)となられたヘレネ様を，血まみれのそのお姿を見とどけなければ[6]」と立ち騒ぐし，メネラオスも妻は殺されたと信じ，死体を取り戻そうとする。「そしてこの手で可哀そうな妻の屍を取り戻すのだ，配偶(つれあい)を殺した奴らを道伴れにやっつけておいて[7]」と叫ぶ。観客も舞台で殺人が直接演じられる以上に生々しく血まみれのヘレネーを喚起することが出来るように戯曲は組み立てられている。そのすぐ後に殺戮現場に居合わせたプリュギア人は殺人のもようを次のように証言する。

「女（ヘレネー）は叫び喚きちらす，
おお，もい，もおい。
白妙の腕で胸を打ち
あわれにも頭をたたく。
そして黄金のサンダルはいた足で
ぐるぐると逃げまわる。
（……）
そして（オレステスは）左の肩へと頸ねじたおし，
喉笛に黒色の刃を
今にも突き立てようとする[8]」

ところが今にも殺されようとした時，ヘレネーはまるで妖術を使ったようにフッと消えてしまったとプリュギア人は言う。オレステス自身も自分が首尾よく目的を達したのかどうか自信が持てない状態である。そういう混乱状態のところへ，アポロンが現われて混乱を収めた事は先に述べた[9]。ゼウスの娘として，ヘレネーはいずれなんらかの昇華を実現して神の世界に移行しなければならなかったわけだが，星になったヘレネーが最も完璧な「超越」例であろう。女性美がひき起しかねないあらゆる不幸はこのようにして男性原理を代表するアポロンによって浄化され合理化されたわけである。それでもプリニウスの記録を読むと合理化は十分ではなかった様で[10]，女性美は崇拝と同時に根強い恐怖心をひき

（6）*Ibid.*, p. 361.
（7）*Ibid.*, p. 368.
（8）*Ibid.*, p. 364.
（9）拙論「白いヘレネーと黒いヘレネー（その一）」『GALLIA』n°.25. 1985, p. 8.
（10）*Ibid.*, p. 9.

起すものであるという事が，新たに確認される。

b．首をくくるヘレネー

しかし異説によればヘレネーは首をくくって自殺したという。

ロドス島ではヘレネーはデンドリーティスという別名で呼ばれている。これはデンドロン（木）から派生した呼び名で，木のヘレネーという意味である。ロドス島に伝わるヘレネーの伝説は，これまで調べてきた華麗な本流の物語とはうってかわって，悲惨で神秘的である。ヘレネーは夫の死後スパルタを追われ，夫の庶子である二人の息子を連れて，ロドス島に住んでいたポリュクソーのもとに身をよせる。ポリュクソーの夫はかつてヘレネーの求婚者の一人であり，トロイア戦争で戦死したトレーポレモスである。彼女はうわべはヘレネーを歓待したが，心の底では夫の死を招いた美女を恨みに思っていた。それである日ヘレネーが風呂に入っている時に，侍女達にエリーニュエスの扮装をさせ，無防御なところを襲わせた。その恐ろしい様子に彼女は気が狂って自ら木に首をくくって死んだという。そしてヘレネーが死んだ木から，蛇の毒に効くというヘレネーの木《ヘレニオン》が生えてきたという。ロドス島にはこのヘレネー・デンドリーティスを祭るために神殿が建てられたとパウサーニアスは伝えている[11]。ロドス島の他にもデンドラという所にもヘレネーの神殿があって，ヘレネーの木が祭られているという[12]。ヘレネーは卵から生まれた白い鳥であった事を思い起そう。その事から鳥のとまる木とヘレネーが結びつけられ，木の女神になったのだろうと想像される。

その上ヘレネーにはアパンコネメ（絞首された女神）という別名もつけられている。他にアルテミスやヘカテーも同じ仇名をつけられている[13]。さらに絞首された女神としては，アテナイのエーリゴネーが有名である。ここでエーリゴネーの物語を紹介しよう。ディオニュソスはぶどうとぶどう酒を人類にひろめようと旅をしていたが，ある日エーリゴネーの父，イーカリオスの家に宿泊する。そこでディオニュソスはエーリゴネーを愛し，彼女はぶどうの神スタピュロスを生む。ディオニュソスからぶどう酒を伝えてもらったイーカリオスは近所の人々にこの酒をふるまうが，酒の不思議な効果を，物が二重に見える毒を飲まされたと勘違いした隣人達はイーカリオスを殺し，松の木の下に埋めた。娘は飼い犬におしえられて父の死体を発見し，絶望のあまりその松の木に自ら首をくくって死んだという。この不幸を怒った神はアテナイの処女達を狂わせ，沢山の処女が首をくくって自殺した。デルポイの神託によって原因を知ったアテナイ市民は罪人を罰し，エーリゴネーの

---

(11) パウサーニアス『ギリシャ記』3，19．9～10.

(12) Robert GRAVES, *The Greek Myths:* 1. Penguin Books. 1960, p. 208.

(13) M．モース，H．ユベール，『供犠』，小関藤一郎訳，法政大学出版局，1983，p. 91.

ための祭りを行なった[14]。ぶどうの収穫祭の時，若い娘達が木に首を吊る真似事をするが，それはこの神話の名残りだという[15]。エーリゴネーは自らを犠牲に捧げることによって豊かな稔りを招く女神達の一人であり，ヘレネーもこれら一連の農耕の女神に連なるものである事は間違いない[16]。イエンゼンはハイヌヴェレ型と呼ばれる殺された女神達の物語が世界中に遍在している事を示した。ギリシヤでは代表的な女神としてペルセポネーがあげられるわけだが，ケレーニィはこのペルセポネーとゴルゴンとが共通している事を指摘した[17]。《ハイヌヴェレ型》の神話素として殺戮，結婚，月，植物，死と誕生等があげられる。ここで詳しくは述べる事はできないが，白鳥は月に結びつけられることもある[18]。従ってペルセポネー＝ゴルゴン＝グライアイ＝ヘレネーを不十分ながら結ぶ一本の糸は不可能ではない。ヘレネーの美しさは見る者の石化させるほどの醜さと紙一重であり，彼女が放つ眩さと暗黒は同じ所から発していることを，白鳥はその肉体で示してくれるのである。

7．「白いは黒い，黒いは白い」

ギリシヤ人は黒鳥を知らなかった。ただイメージとしてグライアイの上に黒い白鳥を重ねていただけである。その後も白い白鳥の中に漆黒を見る想像力は健在であった。ラングロワは白い白鳥が実はまっ黒いということは中世では《あたり前の真実》で，《千年余にわたって信じられてきた》と言っている[19]。想像上の動物が実は実在していたという事がわかったのは，オーストラリア大陸の発見・開発を通じてである。黒鳥がヨーロッパに持ち込まれたのは，1698年ごろで，大いに珍らしがられ，もてはやされたという[20]。イメージが実在に先行した一例であり，想像上でしか存在しないと信じていたものが実在していた事を知った時の驚きは強烈なものだったろうと想像される。

さてここで白鳥＝ヘレネーが後のヨーロッパ文芸でどのように取り扱われたかを問題にしようとするのだが，それには非常に大胆なハサミを使わねばならない。というのはヘレ

---

(14) ヒュギノース『神話物語集』130., ヒュギノース『天文学』, 2,. 4, 4. アポロドーロス『ギリシャ神話』3, 14, 7.

(15) Robert GRAVES; *The Greek Myths;* 1, Penguin Books, 1960, pp.262—263.

(16) 日本の神話においても，白鳥は白く丸い餅と見なされ，穀物神として崇められていた事を思い起そう。

(17) AD. E. イエンゼン『殺された女神』，大林太良・牛島巌・樋口大介訳，弘文堂，1977, p. 117〜119.

(18) Robert GRAVES; *The Greek Myths,* I, Penguin Books, 1960, p. 207.

(19) Gaston BACHELARD; *La Terre et les Rêveries du Repos.,* J. Corti, 1948, p. 20.

(20) 本田清『白鳥のいる風景，文化・生態・保護』ＮＨＫブックス，1979, p. 160.

ネーは実に大きなテーマで，彼女のことを取り扱った文学を網羅することは，一冊の本にしてもまだ不可能な程だからである。この紙面では象徴主義詩人達に取り上げられた白鳥＝ヘレネーのみに限りたいと思う。なぜならこの時代，白鳥のシンボル的力がその頂点に達したということ[21]，それにこの時代の女性美はファム・ファタル（宿命の女性）に代表されるように，不吉で破滅的な美が追求されたからである。ヘレネーもこの時代に到って，やっと白く輝くホメロス的美女の他に「黒く輝くヘレネー」も文学的表現を持つようになったのである。

黒鳥はそのエキゾチックで不吉な美しさ故に，白鳥の影として象徴主義時代には重要なシンボルの一つとなる。それは「宇宙の母胎」であり，「深淵を流れる原初の水」なのである[22]。フィリップ・ジュリアンは黒鳥の代表的表現として，ルネ・ヴィヴィアンの次の詩をあげている。

Mais un jour ils aperçurent un cygne noir
Dont l'aspect étrange détruisait l'harmonie
De leurs blancheurs assemblées
Il avait un plumage de deuil
Et son bec était d'un rouge sanglant[23]

しかしこの時代の白鳥の詩といえば，ヴィエレ・グリファンをあげなければならない。1886年から1923年までの間に彼が出版した30冊弱の詩集のうち，『白鳥』と題された詩集が二冊もあるのである。即ち1887年の第二詩集と1892年の第五詩集である。しかしこの詩人の場合，白鳥は「朝に飛び立つ希望，愛の再生」を象徴する場合が多く，白鳥の負の部分はあまり表現されなかった。詩人は一度だけ，死の舟を引くローエングリン的黒鳥を歌っている。

Jours de deuil qui vous en allez
Comme des cygnes noirs aux lacs crépusculaires,

---

(21) cf. Marcel SCHNEIDER; *La Littérature fantastique en France,* Fayard, 1964, p. 272.

(22) Henri MORIER; *Dictionnaire de Poétique et de Rhétorique,* P. U. F. 1961, p. 221.

(23) Philippe JULLIAN; *Esthètes et magiciens, L'Art fin de siècle,* Librairie académique Perrin, 1969, p. 291.

La barque est vide que vous traînez ;[24]

第五詩集『白鳥』の最後は「ヘレネーの墓」と題する詩である。ここで歌われているヘレネーはホメロス的な，白いかいなの伝統的な美女であるが，この詩の新味といえば，ヘレネーは前夜に死んだことになっていて，死後も不滅の美を誇ってロワール河に幽霊として立ちあらわれたという設定になっていることである。ヘレネーは月の女神セレーネーと重なり合い，さらには銀色の月光を反映して高くうねりながら流れる水のエネルギーに重ねあわされる。

Mes mythes, tu les sais :
Je suis fille du Cygne,
Je suis la lune dont s'exubèrent les mers
Qui montent, tombent, se soulèvent ;[25]

8．黄金の白鳥。

白鳥の中に眩い黒さを洞察し，白鳥が白ければ白い程黒いというパラドックスのテーマを繰り返し取り上げた象徴詩人はアンリ・ド・レニエである。

1897年に発表された「家」という詩では水上に浮かぶ白い家が自我の象徴として歌われる。昼間は家のまわりには花が咲き乱れ，ぶどうや蔦のからまる美しい家だが，夕やみが迫るとこうもりが訪れ，水上には白鳥が二羽浮かぶ。その身体はあくまでも白いが，その二つの影はまっ黒である。ド・レニエはこの四羽を「神秘的な双子達」と呼んでいる。

Et les deux cygnes blancs au-dessus de leur ombre ;
Qui se reflète noir et ne les quitte plus,
Mystérieux jumeaux l'un à l'autre apparus,
Semblent, doubles sur l'onde où leur spectre les suit,
Unir l'heure du jour à l'heure de la nuit.[26]

---

(24) Francis VIELÉ-GRIFFIN ; *Poèmes et Poésies,* 1886—93, Mercure de France, 1895, p. 285.

(25) Francis VIELÉ-GRIFFIN ; *Poèmes et Poésies, Les Cygnes,* Mercure de France, 1895, pp. 242—244.

(26) Henri de RÉGNIER ; *Les Jeux rustiques et Divins,* Les Maîtres du Livre, 1925, p. 146.

白鳥とその黒い影はド・レニエの好みのテーマであったらしく,「鏡に写る牧神獣」と題される詩にもこのテーマが現われている。白鳥は失なわれた幸福,「青ざめた喜び」である。その黒い影は,この喜びが決して甦らない事を示している。

Le cygne blanc y voit dans l'eau son ombre noire
Comme la pâle Joie au lac de ma mémoire
Voit ses ailes d'argent ternes d'un crépuscule
Où son visage nu qui d'elle se recule
Lui fait signe, à travers l'à jamais, qu'elle est morte,[27]

「閾」と題された詩では,流れてゆく時間が水時計,砂時計,打ち捨てられた家,舟,死者等に託して象徴的に歌われているが,その中の重要なシンボルとして黄金の白鳥が全体を締めくくっている。輝かんばかりに黒く,かつ白い白鳥の矛盾を統合する神秘的な色として「黄金の白鳥」という表現が工夫されたのだと思う。時刻としては宵闇である。心配げな「夜」の前で「一つの歳月」が「もう一つの歳月」と隣り合って静かに死んでゆこうとしている。冥府の川を思わせる夜を舟が渡ってゆくが,その舟を曳くのが「黄金の白鳥」である。舟の中には大理石と化した死体が白い敷布の上に横たわっている。古代の冒険家のものらしいその死体の手は舟の舵をしっかりと握っている。この舟は又,もう誰も住んでいない,打ち捨てられた家でもある。赤いカーテン＝舟の赤い帆＝夕焼けはもうとっくに消えてしまっている。夜の川は白と黒のタイルが交互にうねる夜の舗道と重なり合う。そのような背景の中で,黄金の白鳥は不吉で美しい道案内人となる。

Leurs mains sur le drap blanc roidissent la sculpture
De la chair qui devient son marbre par la Mort,
Et les rideaux de pourpre affalent leur voilure
Sur la barque du lit que traîne un Cygne d'or.[28]

この詩を最後まで読んでみよう。黄金の白鳥は無駄な時間がいたずらに流れ込む死の湖から,白と黒の矛盾を止揚して再生する何かの象徴として,再び飛び立つ可能性が歌われている。

Quand le vent soufflera de la mer et du soir
Et que, sur le pavé stygien, blanc et noir,

---

(27) *Ibid.*, p. 24.

(28) Henri de RÉGNIER; *Tel qu'en songe*, Mercure de France, 1925, p. 189.

Abdicateur de par l'envol de son essor,
Délaissera son ombre, enfin, le Cygne d'or.[29]

9．スパルタのヘレネー

アンリ・ド・レニエにも白鳥＝ヘレネーをテーマにした一連の詩篇がある。それらは「スパルタのヘレネー」という総題で『粘土のメタル』という詩集に収められている。ド・レニエのヘレネーはヴィエレ・グリファンのヘレネーに較べてずっと「宿命の女性」の要素を色濃く持っており，より世紀末的といえる。設定としては，たぶんヘレネーがトロイア戦争後，夫と伴に帰国してスパルタの宮殿で豪奢な生活に戻ったという事になっていると思われる。そうしたヘレネーのもとに冥府の使者である黒鳥が迎えにやってくる。誇り高いヘレネーは従容として地獄下りの旅に出るのである。

「スパルタのヘレネー」の最初の詩は「水浴」という題で，美女の水浴という伝統的テーマから始まる。水面はあくまで穏かで，睡っている白鳥と水蓮とは見まちがうばかりにそっくりな姿をしている。しかし水の底では戦士達の呻きと甲冑の響きがこもっている。

Le murmure de l'eau fidèlement furtive
Berce ta solitude et charme ton repos,
Et les cygnes amis de l'onde et de la rive
Troublent seuls le sommeil des nénufars égaux.[30]

ところが「水浴」の後半ではこのような田園風な白鳥とは全く別な白鳥が舟のイメージと重なり合いながら波をけたててヘレネーのところにまっしぐらに突き進んでくる。折しもあたりは夕焼けで赤黒くなり，その色は燃え落ちるトロイアの町と重なり合う。この不吉な白鳥は黒雲のような大きな羽根を拡げ，伸び上って西方へと飛び去る。

Un grand nuage au ciel ouvre ses ailes d'ombre
Comme un funeste cygne éployé lentement
Qui d'un vol fatidique, inexorable et sombre
Grandit, s'étire, monte et plane à l'Occident.[31]

---

(29) *Ibid.*, p. 196.

(30) Henri de RÉGNIER; *Les Médailles d'Argile*, Mercure de France, 1911, p. 126.

(31) *Ibid.*, p. 128.

「スパルタのヘレネー」の最後の詩篇は「舟」と題されている。どのようにかは述べられていないが，ヘレネーは死んだばかりという事になっている。これからヘレネーの地獄の旅が始まるのである。まずステュクス川で彼女を出迎えるのが白鳥である。

Regarde. Vois la rive. Il t'attend près du bord,
Assis, la tête basse, en sa barque d'ébène,
Celui de qui la rame aide à passer les morts...
Et les cygnes du Styx t'ont reconnue, Hélène.(32)

白鳥は首をまっすぐに立て，ヘレネーをじっと見つめながら近づいてくる。白鳥の羽根はあくまで黒く，あたりにはエルボスのバラ，不吉なルツボランが咲いている。

Ils dressent leurs longs cols, anxieux de te voir,
Et s'approchent, battant l'eau sombre de leurs ailes,
Car l'onde est ténébreuse et les cygnes sont noirs
Et pour roses l'Erèbe a la triste asphodèle.(33)

ヘレネーはここで舟に乗せられ，川を下ってゆく。その舟の後を守護役として黒鳥達がついてゆく。この黒い鳥に，レダの白鳥に代表される生命力あふれる原始的エロスを象徴する白い白鳥が二重写しになっているのを，舟の上に立つヘレネーは見る。

Elle, debout, contemple une dernière fois
Derrière elle les cygnes noirs qui l'ont suivie
Et salue à jamais en eux qu'elle revoit
Les oiseaux blancs jadis au fleuve de sa vie.(34)

「舟」の最後の節は，ヘレネーの乗った舟のまわりに，トロイア戦争で死んだ戦士達すべてが水の底から浮上してくる様子を歌っている。ヘレネーを呪って彼女を水の中にひきずり込もうとしているのかと思いきや，戦士達は死後のヘレネーの美しさを讃美するためにやってきたのである。ヘレネーはペルセポネーの様に，冥界の女王として，不滅の美しさを誇るであろう，というのがこの詩の結論部分である。

---

(32) *Ibid.*, p. 136.

(33) *Ibid.*, p. 136.

(34) *Ibid.*, p. 137.

10. 結論にかえて。

白鳥のシンボルがもたらす様々な価値は，序論で述べたように，極端に対立しながら，お互いに関連し合うという，不思議な意味の網を形成している。ギリシヤの女性的白鳥の源はグレートマザーであるらしいのだが，その女性性は最初から恐ろしい怪物と絶世の美女という二極に分かれ，さらにこの絶世の美女も，ある時は極端に良い意味で働き，ある時には極端に不吉な意味で働く。このように正か負かを区別する事が不可能な美女の中に，世紀末の芸術は最高の美を見出したのである。

バシュラールは白鳥の最終的シンボルは「再生力」であると指摘したが[35]，今まで研究してきた，極端な対立が次々とこだまのように他の対立を呼び起す構造こそ，この再生力のシンボルを生み出す源となったのではないだろうか。

---

(35) ガストン・バシュラール『水と夢』小浜俊郎，桜木泰行訳，国文社，1969，p. 63.